

# 北海道を中心とするラッコの出土状況について

島中 翼

## 1. 投稿のきっかけ

私は2023年3月に慶應義塾大学文学部を卒業し、現在は社会人をしております。卒業論文執筆のため「ラッコの考古学」についての研究に取り組みました。研究で釧路市立博物館所蔵のラッコ遺体の調査を許可していただき、それがきっかけで、私の研究を本館報に寄稿する機会をいただきました。本内容は、私の卒業論文を要約したものになります。卒業論文、博物館報の執筆はどちらも初めての経験で、至らない部分や、研究不足な点はあります。私は今現在は社会人として働いているのですが、今後も「ラッコの考古学」についての研究を行いますので、応援よろしくお願いたします。

## 2. はじめに

### 2-1. ラッコについて

ラッコは食肉目イタチ科カワウソ亜科ラッコ属に分類される動物で海棲哺乳類である。ラッコの体長は100-140cm、体重は15-45kg。主な生息域は北海道北部沿岸からアメリカ大陸西海岸まで広がる北太平洋沿岸部である。日本近海ではウルップ島を中心とする千島列島に多く生息し、近年では霧多布岬などでも生息が確認されている(NPO法人エトピリカ基金, 2020)。ラッコの最大の特徴は毛皮である。ラッコは他の海棲哺乳類と異なり、皮下脂肪が少なく、代わりに高い防寒防水機能を備えた毛皮を発達させている。ラッコの毛皮は、哺乳類の中で最高密度の1センチ平方メートルに約10-14万本あるといわれている(中島, 1999)。ラッコの毛皮は、近世以降の中国で特に需要が高まり、毛皮貿易で取引されることが多くなった。毛皮は防寒具の役割の他に、権力や富の象徴とされていたと言われている。肌触りがよく保温性に優れたラッコの毛皮は、上質で特に人気が高く、毛皮を目的とした乱獲によってラッコの生息数が激減した。

### 2-2. 先行研究

北海道のラッコの利用に関する先行研究についてまとめていく。児島(2003)や手塚(2003), Tezuka(2009)では過去の取引内容の資料を読み解き、ラッコの毛皮が古くは室町時代から取引が行われたこと、18世紀初頭にはラッコの毛皮2000枚以上を長崎から中国に向けて輸出していることなどが分かった。このように、文献資料に基づいた研究は多く行われた。しかし、唯一考古学的資料に依拠した研究が北構(1980)で、1980年までに調査された北海道内の

遺跡からラッコの出土状況を整理している。その考古学資料と文献資料と対応させることで、ラッコの毛皮の主な捕獲地域を千島列島であると指摘した。

### 2-3. 問題の所在と研究の目的

考古学資料に基づいたラッコの毛皮貿易に関する研究が少なすぎる点。また、行われた研究が40年以上前のものであるためデータが最新ではない点。以上2点から北海道におけるラッコの利用状況は考古学的視点に基づいた、特に動物考古学的な議論が不十分であることを問題の所在とした。そこで本研究では、最新のデータを用いて考古学的視点からの理解を進めるために、北構(1980)の解釈を、再検討することを目的とした。現在は、北構(1980)の調べた時点と比べて、ラッコ遺体の出土した遺跡数・出土点数ともに大幅に増加しているため、再検討が必要であるといえる。

### 2-4. 分析対象

研究対象は北海道内のラッコ遺体の出土が確認された遺跡とする。慶應義塾大学旧図書館にある北海道内の遺跡報告書と、Hattori et al. (2005)を参考に、ラッコ遺体出土の遺跡をまとめた(表1)。

表1, ラッコの出土状況

No.	北構1980	遺跡名	時期	篩選別	NISP	参考文献
1		トコロ貝塚	縄文時代	なし	1	東京大学文学部編 1963
2		幣舞遺跡	縄文晩期	なし	516	釧路市埋蔵文化財調査センター 1999
4		小幌洞窟遺跡	縄文晩期	なし	26	北大府樹形調査団 1963
3		天草1遺跡 (町道改良地点)	縄縄文後期	1mm,5mm 水洗・乾篩	10	北海道埋蔵文化財センター 2008
5	○	香深井A遺跡	オホーツク文化期	なし	3	東京大学出版会 1981
6		川西遺跡(3号壘穴)	オホーツク文化期	なし	1	北海道立北方民族博物館編 1995
7	○	弁天島遺跡	オホーツク文化期	なし	2	北地文化研究会 1978
8		オタフク岩遺跡 (オタフク岩列島遺跡)	縄縄文-アイヌ (濠文)	なし	4	羅臼町教育委員会編 1991
2'		幣舞遺跡	縄文期	なし	43	釧路市埋蔵文化財調査センター 1999
9		オヤコツ遺跡	アイヌ文化期	2mm 乾篩	2	伊達市教育委員会 1984
10		浜尻貝塚	14-15世紀	1mm 水洗	5	東通村教育委員会 2004
2'		幣舞遺跡	10-近代	なし	26	釧路市埋蔵文化財調査センター 1999

### 2-5. 分析方法

遺跡報告書にラッコの出土の記載があるものを、時期・出土点数・出土部位・篩選別の有無について整理した(表1)。次に、定量的分析を行った。同定された動物遺存体の破片の大小を無視して単純に数え上げた数値を表すNISP。出土骨から推定される個体数の最小値を表すMNI。骨最小



表3, 幣舞遺跡のラッコの年齢推定

	発掘区	L											R										
		M2	M1	PM3	PM2	PM1	C1	I3	I2	I1	II	I2	I3	C1	PM1	PM2	PM3	M1	M2				
上顎骨	C-5																	○	○				
	D-6																	○	○				
	C-5			○																			
下顎骨	B-5		○	○																			
	B-5																	○	○				
	B-4																	○	○				
	D-6		○	○																			
	B-4		○	○																			
	D-5		○	○																			

個体が生息したと記述がある。ラッコの幼獣と母親は、常に一緒に生活をするため、幼獣個体と亜成獣個体の存在から、縄文-続縄文期の幣舞遺跡周辺はラッコの群れが生息し、繁殖地であったと推察される。

以上定量的分析の点から、ラッコ遺体を通してみると幣舞遺跡という遺跡は他の遺跡と比較して、特異な存在であり、特に縄文-続縄文期にかけては他とは全く異なる状況が確認できた。

6. 定性的分析

4-1. 幣舞遺跡のラッコ遺体の様子(図4)

2022年12月6-7日に釧路市立博物館で幣舞遺跡出土のラッコ遺体の調査を行った。幣舞遺跡は釧路川河口から約1km上流の段丘上に立地しており、貝塚や堅穴が多数確認され、動物骨の出土が多いことが特徴である。

報告書の記述の通り、観察によって幣舞遺跡のラッコ遺体のほぼ全身の部位が確認された。また、当遺跡出土の動物遺体には、被熱による変色の遺体が多く見られ、黒や白に変色している骨がある(図4)。また、ラッコ遺体についてはカットマークらしい傷跡が見当たらなかったが、大腿骨だけはほかの部位とは異なる割れ方をしていることが観察された。



図4, 幣舞遺跡のラッコ遺体

4-2. 出土コンテキスト

出土コンテキストについてみると、ラッコ遺体は、墓、土坑、焼土、貝塚、包含層から出土した。図5はそれぞれ

の出土した場所の割合を示したもので、焼土と包含層から出土した割合が大きいことがわかる。

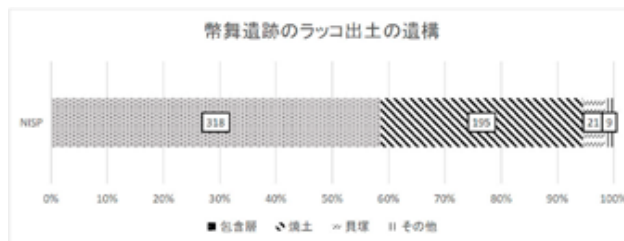


図5, 幣舞遺跡のラッコの出土遺構

墓から7点出土したことや、被熱の影響を受けた骨があること、被熱した骨がまとまって出土したことに注目すると、北海道の縄文時代で行われていたと言われる、焼骨儀礼の可能性を考慮する必要がある。

「噛み跡」について、Moss (2020)の研究を扱い考察を行った。Moss (2020)は、カナダ先住民であるトリンギットの過去のラッコの利用について研究を行っている。遺跡から出土したラッコ遺体についているカットマークと、アザラシ遺体についているカットマークを比較した。アザラシは古くから食利用されていたことが知られており、アザラシと同じようなカットマークがラッコ遺体にもあれば、食利用の可能性があると考えられるが、比較の結果、ラッコ遺体に認められたカットマークはアザラシ遺体のカットマークとは異なる傾向を示したため、食利用があったことは言い切れないと結論した。しかし、ラッコ遺体の大腿骨にはカットマークが多いことを指摘し、イヌによって齧られた傷が多いことを指摘している。幣舞遺跡のラッコ資料を実際に観察した結果、大腿骨だけはほかの部位とは異なって骨幹しか残らない形で破損しているなど、幣舞遺跡出土のラッコ遺体にもMoss (2020)の指摘したのと同じ傾向が認められる。幣舞遺跡出土のラッコ遺体の大腿骨は興味深い史料の一つだと考えた。

4-3. 寒冷化

添田ほか (2018 a, b) はオヤコツ遺跡と小幌洞窟遺跡のラッコ遺体にAMS法による放射性炭素年代測定法を実施した結果、オヤコツ遺跡では13-15世紀を示し、小幌洞窟遺跡は紀元前8-4年を示し、それぞれウォルフ極小期とホーマー極小期に一部対応することがわかった。添田ほか (2018 a, b)はこの結果の解釈として、ラッコが寒冷化により生息域の南限を広げたと指摘している。一方、嶋田ほか (2000)は、珪藻分析により終末縄文から続縄文への移行期のオホーツク海南西部の気候条件は、その前後の数百年よりも寒冷であったことを明らかにしている。これらの情報を総合すると、縄文-続縄文期の幣舞遺跡周辺は寒冷化の影響を受けていたことでラッコが生息しやすい環境となっていた可能性が指摘できる。ラッコの増加については、

ほかにもエサなどの要素も考える必要があるだろうが、寒冷化の影響も縄文-続縄文期の幣舞遺跡でラッコの出土が増えた要因の1つとして考えられる。

## 5. 課題・問題、今後の課題

定量的分析を行った結果、北海道内からラッコ遺体が出土した遺跡の中で、幣舞遺跡は、特異的な存在である、ということが分かった。また、幣舞遺跡出土のラッコ遺体には被熱により変色したものや、イヌに齧られたような跡など、様々な要因で変形・変化があるということが分かった。

総合すると、北海道の外の集団が獲ったラッコが交易品として北海道を経由して本州へと運ばれたとされているが、幣舞遺跡だけはほかの遺跡とは異なる様子がうかがえる。

今後の課題として、幣舞遺跡のラッコ遺体を定性的に調査する必要がある。具体的には、カットマークの有無を再度確認することや、焼骨の存在から、儀礼的扱いについては議論すべきであると考えられる。

## 謝辞

本論文の作成に当たって、慶應義塾大学文学部民族考古学専攻の佐藤孝雄教授、河野礼子教授には多くのご指導ご鞭撻を賜りました。ここに深謝の意を表します。

また、貴重な標本の調査をご許可頂き、調査に際し、多くの便宜をはかっていただいた旭川市博物館の飯岡氏、釧路市立博物館の松本敦氏、澤田恭平氏、NPO法人エトピリカ基金の片岡義廣氏に深く感謝いたします。

## 引用・参考文献

- 池口守 (2019) 動物考古学資料の活用. 西洋史学. 日本西洋史学会. 268 : 62-77.
- 石川郎 (2004) 北海道東部縄文晩期後半から続縄文初頭における動物の取り扱いについて—釧路市幣舞遺跡を例として—. アイヌ文化の成立 : 宇田川洋先生華甲記念論文集. 3-30.
- 石山巳喜夫. (2014). 歯の比較解剖学. 医歯薬出版. 東京. 第2版.
- 鶴澤和宏 (1998) 北黄金貝塚出土オットセイ骨の解体痕の研究. 考古学雑誌. 83 (2) : 46-72.
- NPO法人エトピリカ基金 (2020) 霧多布のラッコたち. 北海道.
- 大塚和義 (2003) 北太平洋の先住民交易と其歴史的意義. 北太平洋の先住民交易と工芸. 思文閣出版. 5-16.
- Karl B.Schneider. (1973) Age determination of Sea otter. Marine Mammal Investigations. 8.
- Karl W.Kenyon. (1969) The Sea otter in The Eastern Pacific Ocean. North American Fauna. 68.

- 北構保男 (1980) 海獣捕獲文化とラッコ. 北海道考古学会. 北海道考古学. 16 : 1-13.
- 児島恭子 (2003) 日本史の中のラッコ交易. 北太平洋の先住民交易と工芸. 思文閣出版. 32-35.
- 添田雄二・青野友哉・富塚龍・永谷幸人・小林孝二・三谷智広・菅野修広・松田宏介・片山弘喜・杉山真二・渋谷綾子・甲能直樹・宮地鼓・中村賢太郎・渡邊剛 (2018 a) 小氷期最 寒冷期と巨大噴火・津波がアイヌ民族に与えた影響Ⅲ. 北海道博物館研究紀要. 3 : 119-132.
- 添田雄二・青野友哉・富塚龍・永谷幸人・小林孝二・三谷智広・菅野修広・松田宏介・片山弘喜・杉山真二・渋谷綾子・甲能直樹・宮地鼓・中村賢太郎・渡邊剛 (2018 b) 小氷期最 寒冷期と巨大噴火・津波がアイヌ民族に与えた影響Ⅳ. 北海道博物館研究紀要. 4 : 57-72.
- 手塚薫 (2003 a) ウルップ島のラッコ猟. 北太平洋の先住民交易と工芸. 思文閣出版. 144-149.
- Tezuka,Kaoru. (2009) Ainu Sea Otter Hunting from the Perspective of Sino-Japanese Trade. 国立民族学博物館学術情報リポジトリ. 72 : 117-131.
- 手塚薫 (2010) 千島列島における先史文化の適応と資源獲得・流通の検討. 北海道学術情報リポジトリ. 北海道学園大学. 46 : 73-95.
- 手塚薫 (2012) 千島列島における資源・土地利用の歴史生態学的研究. 科学研究費助成事業研究成果報告書. 北海道学園大学. 1-6.
- 中島将行 (1990) ラッコの生活. 海の哺乳類 : その過去・現在・未来. サイエンス社. 218-226.
- 西村三郎 (2003) 毛皮と人間の歴史. 紀伊國屋書店, 精興社, 東京.
- 西本豊弘 (1985) 北海道縄文時代イノシシの問題. 古代探叢. 2 : 137-152.
- Kaoru Hattori, Ichiro Kawabe, Ayako W.Mizuno, and Noriyuki Ohtaishi. (2005) History and status of sea otters, Enhydralutris along the coast of Hokkaido, Japan. Mammal Study. 30 : 41-51.
- Kaoru Hattori, Alexander M.Burdin, Masatsugu Suzuki and Noriyuki Ohtaishi. (2002) Age-Related Change and All emery of Skull and Canine Sea Otters, Enhydralutris. Mammal Study. 439-447.
- 馬場脩 (1979) 樺太・千島考古・民族誌 1. 北海道出版企画センター. 北海道.
- Madonna L. Moss. (2020) Did Tlingit Ancestors Eat Sea Otters? Addressing Intellectual Property and Cultural Heritage through Zooarchaeology. AmericanAntiquity85.2 : 202-221.